

インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間（平成26年度第2回研究会）

日時：平成26年11月22日（土曜日）

場所：本郷サテライト7F

報告者：片岡樹

報告タイトル：タイ国のババ墓碑ーバンコクとプーケットの事例報告ー

内容：

東南アジアにおいてババというのは、一般的に、中国からの移民男性が現地女性と結婚し、その結果として母子関係を通じて子孫がホスト社会に文化的に同化した存在だと考えられている。ただしマラッカでの実証研究などからは、通婚が盛んに行われたのは主に移民第一世代に集中すること、その後の世代においてはむしろババ内部での縁組みがむしろ卓越してきたことが明らかになっている。にもかかわらず、現在のタイ国においては「ババとは中国人の父とタイ人の母との間に生まれ現地語を話す混血者である」というステレオタイプが普及している。このステレオタイプがどの程度あてはまり、どの程度あてはまらないかを検証すべく、報告者はバンコクおよびプーケットでのババ墓地において墓碑の調査を行った。

その結果として、1940年代以降に急速に衰退するバンコクのババ社会においては、（墓碑で見ると）現地女性との通婚例は見られないこと、また墓碑の表記言語のほとんどが中国語、英語、および両者の併記であることが明らかになった。またプーケットのババ墓碑の場合、タイ仏教式の仏塔型火葬墓はかなり初期の墓にも見出される（つまり定着初期からタイ仏教の受容が進んでいた）こと、にもかかわらず明示的にタイ人女性との通婚を示す墓碑が極度に少ないこと、墓碑での表記言語にタイ語が増加し始めるのが1980年代以降であることが明らかになった。

以上から、タイ国におけるババ社会の特徴として次のような結論が得られる。

①タイ国におけるババ社会の成立は、中国人単身男性と現地タイ人女性との結婚ではなく、すでに旧海峽植民地においてババとして定着していた移民たちの再移住によってなされた可能性が強い。

②バンコク、プーケット双方での墓地の言語使用状況から見ると、ババのタイ語化は通婚の結果ではなく、1940-50年代以降の政府による強制的タイ語化政策の産物であると思われる（1940年代に消滅したバンコク・ババにおいて墓碑でのタイ語使用が極端に少なく、プーケットにおいてはその影響を受けた世代が成人化する1980年代になって墓碑のタイ語化が急速に進行している）。